

旺文社

古語辭典

新版



旺文社
古語辞典

新版

松村 明
今泉忠義 編
守随憲治



編者のことば

ここ数年来、一般社会人の間で古典を学ぼうとする人たちの数がふえているようである。わが国には、「万葉集」「源氏物語」など民族の文化遺産ともいふべき多くの古典がある。時の試練にたえぬいてきたそれらのすぐれた文学にじかに接したいと願うのは、私たち日本人にとって、きわめて自然な感情であり、古典に親しむ人々の層が厚くなることはまことに喜ばしいことといわねばならない。

ところで、古典を原文で読むことは容易ではない。現代人は、ある意味で古語に対して外国語と同様の隔たりを感じる。古典を読むためにはそれ相應の修練が必要である。そして、古典とのかの隔たりをとり除くための手引き書として古語辞典は不可欠である。学校教育ではいかに及ばず、生涯教育が叫ばれる今日、正確でわかりやすい、学習者の立場に立った古語辞典の必要性はますます増大している。

古典を学ぶために真に役だつ辞典をめざして「旺文社古語辞典」をはじめて世に出してから、もう二十余年になる。私共はその間、学生をはじめ多くの読者が古語辞典に求めるものは何かを探り、教育の現場や多くの読者諸氏からの助言に絶えず耳をかたむけ、考え得るあらゆる配慮を加えてきた。一方、学問上の研究成果を積極的にとり入れ、資料を整備し、いく度もの改訂を通じて、心をこめてこの辞典を磨き上げてきたつもりである。

本辞典は、幸いにして学生諸君をはじめ広い層から絶大な評価を頂き愛用されてきた。これまで頂いてきた広範の読者諸氏のご支持に対し、心から感謝し、厚くお礼を申し上げる次第である。

さて、過去四度にわたる改訂で、内容の充実をはかってきたが、今回、さらに全面改訂を行うことにより、本辞典のすみずみまで、検討、改善を加え、学問的により正確に、学習者により親切に、わかりやすくする努力を結集させた。創刊以来の特色にさらに磨きをかけて出すわけであるが、「旺文社古語辞典〈新版〉」が、これまで以上に高校生、大学生、また古典を学ぶ一般社会人の皆さんに受け入れられ、利用されることを願って止まない。

このたびの新版編集に当たっては、新たに山口明徳氏と和田利政氏の参加を得た。両氏の献身的なご尽力に対し厚くお礼を申し上げますとともに、執筆にご協力をいただいた学友諸氏ならびに、私共を督促してくれた編集部の方々に深甚の謝意を表したい。

一九八一年 初秋

編者

刊 行 に あ た り

旺文社古語辞典を初めて刊行したのは一九六〇年のことである。今までの約二十一年間に四回の改訂を経、今回は五度目の全面改訂ということになる。ほぼ四年間に一度の割の改訂回数で、これは類書中最多であろうと思う。それには二つの理由がある。年ごとに見るべきものの多い国語国文学関係の研究成果をいち早く適切に反映させようとしたことがまずその一つ。もう一つは、創意・工夫のあくなき追求・取り入れである。時代とともに利用者の望むところも変わるから、それに応じた諸々の要素を盛り込む必要がある。この積極的な編集態度が幅広い方々の賛同を得、長年にわたって多数の愛用者に迎えられた最大の因ではなからうかと考える。まことにありがたいことで、辞典を編集・出版する者にとって、これにすぎる喜びはない。

さて、今回の改訂で最も力を入れた点は次の四つである。(一)、最新の研究成果を適切に踏まえて学問的な正確さを期したこと。(二)、活用本位の充実した内容と学習直結の行きとどいた解説を徹底させたこと。(三)、初めて古語辞典を手にする方々の身になって考え、引きやすさ・見やすさ・わかりやすさを十分に勘案したこと。(四)、とかく古典敬遠に傾きかねない現代の高校生の心を古典の世界へ誘い入れるべく、随所に興味深い参考学習記事を挿入したこと。以上の四点をさらに具体的に述べると、左記のとおりである。

一、上代（奈良時代）から近世（江戸時代）までの古典の中から語句四万三千を見出し語として採録し、重要語には星印をつけて示した。

高校 大学での古典の学習や研究に十分役立つよう、有名古典を中心に、基本古語から難解な語句まで幅広く収めた。また、見出し語全部を学習上の重要度に基づき、大活字使用と星印とによって三段階に分けて標示し、重点学習が能率的になされるよう工夫した。なお、現代かなづかいによる見出しをも多く掲げて、歴史的かなづかいに不慣れな場合でも楽に引けるよう配慮した。

一、古典にかかわりの深い地名・人名・作品名や、著名な和歌・俳句なども積極的に見出しに収録して解説した。

一般古語のほかに、古典に出る人名・地名・作品名などの固有名詞約二千余を採録して解説し、また、教科書・大学入試問題によく出る和歌・俳句・狂歌・川柳ほぼ一千二百を全釈・補注つきで収めた。なお、見出し語で俳句の季語となるものにはその季を明示して俳句学習の一助とした。

一、語義解説は的確・平明をむねとする一方、語の組成・語感を示し、重要語には関連事項の解説や掘り下げた詳説を付した。

訳語や説明文では学問的な正しさとわかりやすさを第一義に考えた。また、ことばの成り立ちや構成を「組成」欄で、その語本来の意味・ニュアンスを「語感」欄で明らかにし、「参考」欄で語義の補足説明や関連事項の説明を行った。今回新たに設けた枠囲み記事の「学習」では、古文解釈上まちがえやすいところやわかりにくい点、覚えていけると学習に便利なことなどを記した。

一、文法に関する項目は特に目立たせて詳細な解説を施し、語の歴史の変遷にも言及した。

文法上の解説は一般の教科書に載るいわゆる学校文法にのっとった。「接続」「語法」「語史」欄では、その語の接続関係や文法機能、時代による語

の移り変わりを詳述した。形式の上では、今回、主要な助詞・助動詞を特別の大活字で目立たせ、さらに上部に飾りけいをつけた。助動詞には活用表を組み入れた。敬語にも十分なスペースを割いて詳しく説明した。

一、用例には、語義の理解を助け、深める、適切でわかりやすい短文・短句を精選し、難しい部分には注釈や補足を添えた。

見出し語の用例は、語義の区分に応じて、教科書・有名古典を軸に適切な例文を採用した。助詞・助動詞やその他の最重要語には、一語義に二つ以上の用例を掲げて、実際の用法がよくわかるよう配慮した。また、難解な用例には補説・部分訳を加え、引用箇所だけでは意味のとりにくいものは適宜語句を補足して文意をつかみやすくした。出典はつとめて詳しく示し、原典照合の便を図った。なお、今回、用例中の和歌・俳句が見出しとしても採録されている場合は、例えば（歌意は九七ページ）のように記し、理解の深化と関連学習に意を払った。

一、本文中の挿絵や付録の図鑑、カラー版の口絵等を豊富に掲げた。

視覚による理解を重視し、本文中に挿絵六百八十個、付録に二十五ページにわたる参考図鑑を収めた。また、カラーでなければ表すことのできない「古典にあらわれる色」^{『鑑の色目』}「鑑の緋」や絵巻類を口絵に、「旧国名地図」「万葉大和地図」「京都・伏見付近図」を見返しに掲げた。

一、古典学習全般にかかわる実用記事や各種の表を付録に網羅し、別冊「古語学習の手引き」（四十八ページ）を特別付録とした。

巻頭に「歴史的かなづかい一覧」、巻末に「国語・国文法用語解説」「主要文法事項一覧」「古典の背景」「国文学史年表（付、時代別文学概観）」「画引き 古典難読語一覧」「和歌・俳句索引（付、歌謡・狂歌・川柳・百人一首）」、その他の有益な内容を充実させた。今回新たにつけた特別付録「古語学習の手引き」は、初心者のための古語辞典入門書であり、また、古語・古文の効果的能率的学习法をコンパクトにまとめたものでもある。

おわりに、新版の刊行にあたり、立案から校正までの長い期間、熱心なご指導とご労苦を賜った編者の先生方に心から謝意を表したい。また、執筆・校正に多大のご協力をいただいた方々を左に記して、厚くお礼を申しあげる次第である。

青木一男・荒木雅実・安西迪夫・飯塚幸司・伊原 昭・岩下裕一・宇田零雨・大野邦男・加藤裕一・川口祥子・河鐸実英・小泉淳子・幸村 武・小久保崇明・三条西公正・島田耕治・瀬戸由美子・平館英子・千葉 豊・坪内正紀・寺田純子・中野沙恵・花輪茂道・細川 修・堀川 昇・待井新一・松下 進・森 昇一・森 澄夫・山崎一穎・山下富雄・吉野辰男（敬称略、五十音順）

なお、この辞典の編者である今泉忠義先生が先年お亡くなりになった。初版以来、先生には絶大なご尽力を賜ってきた。あらためて深く感謝するとともに、心からご冥福をお祈りする次第である。

この辞典のきまりと使い方

この辞典は、日本古典の読解や研究を志す人々のために役だつように編集したものである。高校における古典の学習、大学入試準備にはもちろん、専門の大学生や古典に親しもうとする一般社会人にも利用しやすいように、多くの考慮が払われている。つぎに本書のだいたいの構成を示す。

採録語について

◇本文に収めた語は約四万三千語である。上代（奈良時代）から近世（江戸時代）までの、日本の古典にあらわれる主要な語を、つぎの方針によつてもれなく採録した。

- ①古典では用いられたが、現代では用いられなくなった語。
 - ②古典では現代の語義と異なった意味で用いられた語。
 - ③古典から現代まで語義が同じに用いられている語で、重要な語・頻出する語および難解な語。
 - ④古典に用いられる接辞（接頭語・接尾語・助数詞）・語根の類。
 - ⑤有職故実・陰陽道・仏教関係用語で、古典読解に必要な語。
 - ⑥枕詞まくらことば、古典に多用される慣用連語・ことわざ・故事成語の類。
- ◇つぎの種類の語をも特に見出し語に収めて、古典の学習に広く役だつようにつとめた。

- ①古典を理解するうえで必要な地名・人名・作中人物名、文学史上重要な作品名および文学史・文芸用語。
- ②教科書・大学入試問題に多く出る著名な和歌（百人一首全部を含む）・俳句・歌謡・狂歌・川柳。
- ③主要な助動詞の全活用形。すなわち、未然形・連用形・終止形・連体形・已然形・命令形のすべて。
- ④現代かなづかいによる検索のための見出し。

付録

巻頭と巻末には古語・古典の学習や理解に必要なつぎの項目を掲げた。

▽巻頭付録（カラー版）

- 源氏物語絵巻
- 石山寺縁起
- 四条河原図巻
- 小野雪見御幸絵巻
- 春日権現験記絵
- 平治物語絵巻

▽巻末付録

- ▽国語・国文法用語解説
- ▽主要文法事項一覧
- ▽枕詞・序詞一覧
- ▽縁語・掛詞一覧
- ▽歌枕一覧
- ▽古典の背景
- ▽有職故実参考図
- ▽時刻・方位・月齢表・月日の名称
- ▽二十四節気表・干支順位表
- ▽国文学史年表（付、時代別文学概観）
- ▽季語集
- ▽年代対照表
- ▽重要系図・学統表
- ▽主要通過儀礼一覧
- ▽年中行事一覧
- ▽官位相当表
- ▽貨幣一覧表
- ▽名数一覧表
- ▽画引き古典難読語一覧
- ▽変体仮名字一覧表
- ▽万葉仮名一字表
- ▽和歌・俳句索引（付、歌謡・狂歌・川柳・百人一首）
- ▽主要用例出典一覧

本文

【一】見出し語

1 表記法

- (1) 見出し語は歴史的かなづかい・太字で表記した。ただし、拗音゛・促音っは小字（右寄せ）、外来語の長音は「ー」で示した。

〔図版〕
○古典にあらわれる色
○襷たぶの色目
○鍔つばの緋

- (2) 国語・漢語はひらがな、外来語はカタカナで示した。
 (3) 二通りのかなづかいのあるものは両方を見出しとして掲げ、より一般的なもののほうに語釈をつけた。

- 例 「いはけなし」(「一般的かなづかい」と「いわけなし」の両見出しで掲出。
 歴史的かなづかいと、現代かなづかいとが相違する語のうち、重要な語(主として**印および*印の語)、ならびに漢字熟語を構成する漢字には、現代かなづかいによる見出しを掲げて検索の便をはかった。なお、相当漢字のないものには、(新かな) (旧かな)と明示した。

例 あおい「葵」 ↓あふひ

こう「広」・光「皇」・荒「黄」・曠「くわう」

あわれ(新かな) ↓あはれ(旧かな)

- (5) 見出し語を構成する要素を「」を用いてくぎった。

例 あゝ(吾君) あさ(かけ)朝影

あひ(かまへて)相構(へて) べくもあらす

- ただし、固有名詞・枕詞は、一部を除いては「」を省略した。

- (6) 動詞・形容詞は、終止形で掲げ、語幹と活用語尾とに区切れるものは、その間を「・」で区別した。

例 おほす「思す」 さやけし

- (7) 形容動詞は語幹だけを掲げた。

例 さっさつ(嵐嵐)(形動タリ)

- (8) 主要な助動詞については、終止形のほか、語形の変化する他の活用形のあるものは、そのすべての活用形を掲げた。

例 し 助動詞「ぎ」の連体形。ね 助動詞「ぬ」の命令形。

- (9) 和歌・俳句・歌謡・狂歌・川柳は第一句を見出しとして掲げた。

例 きみがため(和歌)

- (10) 三字以上の見出し語に、他の語が結合して一語となっている複合語は、原則としてその基本となる見出し語の後に一括して掲げ、親見出しとの重複部分は「」で示した。この種の語は、それぞれ行を改めて掲げた。

例 みやび「雅び」

—こと「雅び言」

—やか「雅びやか」

◇この辞典のきまりと使い方◇

- ある見出し語に、他の語句がついてきた慣用語・ことわざ・格言などは、その基本となる見出し語との重複部分は原則として「」を用い、ひらがな・太字で表記し、相当する漢字は(一)に包んで示した。この種の語は、最初のものだけ行を改め、あとはすべて追ひこみで掲げた。

例 さんづ(三途)

—のかは(川) —のやみ(闇)

- (13) 人名は原則として姓名で引くようにし、名または号で呼びならわされているものは、それをも見出しとし、姓名の見出しのほうで解説した。

例 いっさ(一茶)「人名」 ↓こばやし(いっさ)

2 配列

- (1) 語の配列は五十音順により、同じつづりの語は、つぎの方針によった。

- (2) 清濁については、清音・濁音・半濁音の順。

- (3) 和語・漢語・外来語の順。

- (4) 語根・接辞・単語・連語・枕詞・現代かなづかいによる見出しの順。

- (5) 接辞は接頭語・接尾語・助数詞の順。

- (6) 単語は名詞・代名詞・動詞・形容詞・形容動詞・連体詞・副詞・接統詞・感動詞・助詞・助動詞の順。

- ただし同音・同品詞のときは、見出し相当漢字の字数、ついで最初の漢字の

- 面数の少ないものから多いものへと順に並べた。

- (7) 「」のついた複合語、および慣用語・ことわざ・格言などは、親見出しのものに一括して五十音順に並べた。

- (8) 重要語の標示、助詞・助動詞の特別表記

- 学習上の重要度により、全体の見出し語を三つの段階に分けた。

- (1) 活字の大きさを変え、星印(★および☆)によってつぎのように最重要語と次

- 位重要語とを区別した。

- 例 ★のたまふ 最重要語(約九五〇語)

- ☆のたまふ 次位重要語(約四、四〇〇語)

- ★のたまふ 最重要語(約九五〇語)

- ☆のたまふ 次位重要語(約四、四〇〇語)

- ★のたまふ 最重要語(約九五〇語)

- ☆のたまふ 次位重要語(約四、四〇〇語)

- ★のたまふ 最重要語(約九五〇語)

- ☆のたまふ 次位重要語(約四、四〇〇語)

- ★のたまふ 最重要語(約九五〇語)

- ☆のたまふ 次位重要語(約四、四〇〇語)

◇この辞典のきまりと使い方◇

- (2) 「一」のついた複合語、および慣用連語・ことわざ・格言などは、他と同じ大きさの活字とし、星印だけで重要度を示した。
- (3) 主要な助詞・助動詞では、活字の大きさを変え、かつ、語釈および解説の上に飾りけいをつけて目立たせ、さらに、語義ごとに行を改めて見やすくした。

【三】 見出し語の漢字表記

- (1) 見出し語のなかに相当する漢字を「」内に示した。その際、送りがなやその他のかなは、ひらがな・歴史的かなづかいによった。
- (2) 常用漢字の字体は、「常用漢字表」に従った。また、見出し語に二種以上の漢字表記がある場合は最も標準的なものから先に掲げた。

例 **かくにん**〔楽人〕 **しをり**〔采・挽り〕

- (3) 和歌・俳句・歌謡・狂歌・川柳などは、その全文を、「」内に囲んで示した。

例 **はるすきて**：「和歌」〔春過ぎて夏きたるらし白樺の衣ほしたり天々の香山山雲〔万二・六・持統天皇〕

【四】 読み方

- (1) 見出しのかなづかいが現代かなづかいと一致しないものには、見出し相当漢字のつぎに、カタカナで小さく割り書きで示した。なお、その表記と異なった慣用的な読み方のあるものは（）に囲んで付け加えた。

例 **たまふ**〔賜ふ・給ふ〕

- (2) 見出し語とかなづかいの一致する部分は省略して「」で示した。

例 **みをつくし**〔漆桶〕

【五】 品詞および活用

- (1) 各語の品詞および活用は、九ページの「略語・記号表」に基づく略語を用い、（）に囲んで示した。
- (2) 品詞の分類および活用の種類については、現行の学校教科書の最も一般的なものに従った。ただし、つぎの点に注意してほしい。
- (3) 見出し語が造語成分のときは（語根）として指示した。

例 **ほの**（仄）（語根） **しづ**（静）（語根）

- (4) 普通名詞の中で、動詞のサ行変格活用および形容動詞の語幹となるもの、

または形容動詞の語幹だけを見出しとして挙げてあるものについては、それぞれ品詞を掲げて語幹であることを示すとともに、語尾の活用も掲げて用法を指示した。

例 **そうらん**〔奏覧（名・他サ変）〕 **ふびん**〔不便（不慣）（名・形動ナリ）〕

例 **おい**（ら）（形動ナリ）

- (ウ) 動詞は自動詞・他動詞・補助動詞の区別を示した。

例 **きこゆ**〔聞く〕 **きこ**（自ヤ下二）……

例 **きこ**（他ヤ下二）……

例 **きこ**（補助ヤ下二）……

- (ハ) 助詞はつぎの六分類に従った。

①格助詞 ②接続助詞 ③副助詞

④間投助詞 ⑤係助詞 ⑥終助詞

- (オ) 用言・助動詞・活用する接尾語には、活用の種類を示した。

例 **まどふ**〔迷ふ・惑ふ〕（自ハ四） **なつかし**〔懐かし〕（形シク）

例 **けり**（助動ラ変型） **だつ**（接尾タ四）

- (カ) 主要な助動詞では、その活用形を、**接尾欄**に続けて表組みで示し、それ以外

の助動詞では（一）に一つで示した。

例 **ぬ**（助動ナ変型）

接尾欄……

用		未然	連用	終止	連体	已然	命令
活	な						
	に						
		ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ

やしゃんす（助動サ変型）（ヤシヤンシヤン・ヤシヤンシヤン・ヤシヤンシヤン・ヤシヤンシヤン）

- (キ) 名詞のうち、代名詞は別に立てた。

(ク) 固有名詞のうち、物語・随筆・日記などの作品名、作家・歌人・俳人および歴史上の人物や作中人物などの人名、山・川・関などを含めた地名に限って、「作品名」「人名」「地名」と明示した。

【六】 語釈および解説

- (1) 語釈および解説は的確・明瞭を旨とし、助詞・助動詞・敬語、その他の重要語については、特に詳しく述べた。さらに、必要に応じて**感嘆**・**調態**・**採意**・

【十一】語 史

詞史

重要語のうち、特に必要なものについては、時代による語の盛衰・語義の移り変わりを詞史欄を設けて説明した。

【十二】参 考

例

説明にいつその徹底を期するため、例欄を設けて、語義の補足説明、見出し語に関連する重要事項の説明、類似語との比較説明、そのほか古語・古典を理解する上で参考となる事項について解説を加えた。

【十三】学 習

『学習』

学習に役立つことを第一義に考え、古文解釈上まちがえやすいところや分かりにくい点、また覚えていようと学習に便利なことなどを、枠囲みにした『学習』欄を設けて解説した。

【十四】季 語

俳句の季語となる見出し語には、その語釈の後に四季歌の略語で季を指示した。また、見出し語から派生した季語は、つぎのように(一)に囲んで示した。

例 あし・草・蘆……(草の芽生 草茂る 草の花・草の穂)

なお、季語全体については付録「季語集」(三頁、ページ)を参照されたい。

【十五】用例・出典

(1) 語義の理解を助ける適切な用例をつぎの基準によって積極的に採録した。

① 著名古典を中心とし、さらに教科書・大学入試問題などによく取り上げられ、親しまれているもの。

(2) 文脈がわかりやすく、短くくぎれるもの。

(3) 表記は、歴史的かなづかいにより、漢字表記の部分はすべて「常用漢字表」に従った。また、むずかしい漢字には読みがなをつけ、あるいはかな書きに改め、送りかなや句読点を補うなどして読みやすくした。

(4) 見出し語に当たる部分は「一」で示した。見出し語が動詞・形容詞・形容動詞の場合は、語幹を「一」で示し、活用語尾は「・」でくぎってその下に示し

た。連語の類もこれに準じた。

例 わぶ(佐)……………。「この須磨の浦に心あらん人は、わざとも一・びてこそ住むべけれ」

ただし、語幹・語尾の区別のない動詞(上・下・一・力変・サ変・下二の得)、および助動詞については、それらが活用して見出し語形が変化した場合、見出し語相当部分を太字で示した。

例 る(居る)「(自ワ上)……………」。「寝殿に、薦みさせじとて縄をはられたりける」

まほし(助動シク型)……………。「物のなさけ知らぬ山がつも、花の蔭にはなほやすらはまほしきにや」

(4) 用例文のうち、主語や目的語、または文脈が省略されてわかりにくいものは適宜つぎの形式で「一」に囲んで補足した。

例 すさふ(荒ぶ)進ぶ・遊ぶ……………。「源氏と紫上は」もろともに物などまゐる(召シアガル)。(姫君は)いとかなげに一・びて」

(5) 用例文中のわかりにくい語句には、用例の補説・解釈を(一)に囲んで漢字・カタカナ交じり文で示した。

例 笛のねのただ秋風と「マルデ秋風ノヨウニアワレ」聞こゆるに

(6) 用例中、長文のものは、省略しても十分意味のわかる部分を「……」で示し、中略した。

(7) 用例に和歌・俳句をとりあげ、その和歌・俳句が見出しにもとりあげられている場合は、内容のいつその理解をはかるため、歌や句全部を掲げ、つぎのように参照ページを明示した。

例 「名にし負はば一こととはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」(歌意は八四ページ)《古今・嵯旅》

(8) 出典の示し方はつぎの方針によって略語を用いた。個々の出典名については「主要用例出典一覧」(四二ページ)を参照されたい。

例 「古事記」は「記」、「日本書紀」は「皇極紀」のように「〇〇紀」とした。

(9) 原則として、物語類は「物語」を、日記類は「日記」を、歌集は「和歌集」の部分を省略した。ただし、私家集は書名をそのまま掲げた。

例 《堤中納言・貝あはせ》《土佐》《古今・恋》

(10) 和歌には歌集名・部立てを、俳句には句集名と作者名を記した。「万葉集」

は巻数と国歌大観番号を示した。

〔新古今・冬〕《猿蓑・芭蕉》《万・五・元》

〔芸能に関するものは、その種類（略称）と作品名とを掲げた。〕

〔浄・先代萩〕《謡・鉢木》《歌舞伎・幼種子敬討》

〔近世の小説のうち、「浮世草子」「仮名草子」「黄表紙」「洒落本」にはそのジャンル名を示した。〕

〔浮・婉久一世〕《仮名・竹斎》《黄・栄華夢》《洒・辰巳之園》

〔近世の作品には、「近松」「西鶴」「黙阿弥のものに限り、作者名を入れた。〕

〔浄・曾根崎・近松〕《浮・永代蔵・西鶴》《歌舞伎・白浪五人男・黙

阿弥〕

〔川柳は、「柳多留」「柳多留拾遺」所載のものだけは出典名を示し、それ以外は「川柳」として掲げた。〕

〔著名な出典には、「巻名」「巻数」「段数」「編名」「小見出し」などを指示した。〕

〔「枕草子」は段の冒頭部分に掲げた。〕

〔「源・夕顔」《栄花・殿上の花見》《今昔・三・四》《平家・六・入道死去》《盛衰記・三》

《徒然・〇》《おくのほそ道・平泉》《雨月・浅茅が宿》

略語・記号表

品詞・その他

(名)	名詞
(代)	代名詞
(自)	自動詞
(他)	他動詞
(動)	自・他の区別のつけない動詞
(補動)	補助動詞
(形)	形容詞
(形口)	口語活用の形容詞
(補形)	補助形容詞
(形動)	形容動詞
(形動口)	口語活用の形容動詞
(連体)	連体詞
(副)	副詞

(接)	接続詞
(感)	感動詞
(助動)	助動詞
(格助)	格助詞
(副助)	副助詞
(間助)	間投助詞
(係助)	係助詞
(接助)	接続助詞
(終助)	終助詞
(接頭)	接頭語
(接尾)	接尾語
(助数)	助数詞
(語根)	和語の単語以前のもの
(活用)	四段活用

その他

↑ ↓	↑ ↓
Ⅱ	Ⅱ
*	*
**	**
語	語
同義語	同義語
対語・反義語	対語・反義語

図表

季語を示す

語などを示す

この印のある語義①②③…までの全体に共通する同義語・反義語などを示す

語積の前について、語の種別・位相などを示す

現代かなづかいによる見出し語。↓の下の正しい見出し語を参照する

語積がない場合、他の見出し語の語積を参照する

語積がある場合、さらに他の見出し語や付録などを参照すると理解が深まる

きさき」など、および複合語（「いりーえ⇕入り江」「しづーえ⇕下枝」など）

【あ
行】

[illegible]

一覽表の見方

第一段は現代かなづかい
第二段は歴史のかなづかい
第三段は相当漢字

[illegible]

イワフル
イワンヤ
イン
いはる
いはんや
イン
所謂
況
允・引・印
因・胤・音
殷・淫・陰
飲・蔭
尹・員・院
シ

シ

韻

ウレフシ

うるはし

麗・美・愛

ウイ
・イ・ウ・生

初

エ

ヘ

家

ウエ
・ウ・

上

エ

エ

回・会・廻

ウオ
・ウ・

魚

エ

エ

恵・給・慧

ウカガ
・ウ・

伺・窺

エ

エ

永・曳・英

ウケガ
・ウ・

肯

エ

エ

映・榮・洩

ウケタ
・ウ・

承

エ

エ

裔・堂・貌

ウシ
・ウ・

氏

エ

エ

影・顔・叙

ウシオ
・ウ・

潮

エ

エ

嬰・櫻

ウシナ
・ウ・

失

エ

エ

衛

ウスタ
・ウ・

珍・滴

エ

エ

醉

◇歴史のかなづかい一覧◇

ウスタ
・ウ・

埋

エ

エ

画

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

鵝

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

疑

エ

エ

笑・淫・靨

ウスタ
・ウ・

</

[illegible]

